

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 5月17日現在

機関番号：34304

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22520447

研究課題名（和文）ドイツ語の文法体系にみられる構文ネットワークについて：結果構文を中心に。

研究課題名（英文）On the Constructional Network in the German Grammatical System: With Special Reference to Resultative Constructions

研究代表者

島 憲男（SHIMA NORIO）

京都産業大学・外国語学部・教授

研究者番号：80360121

研究成果の概要（和文）：ドイツ語の結果構文は、構文としてまとめた文法的カテゴリーを形成する一方で、その具体的な用例には意味的・統語的な多様性が指摘されてきた。本研究課題では、当該構文の一断面と隣接・近接関係にあると考えられる他の文法的カテゴリー（結果の目的語、中間態構文）との連続性や競合関係に注目することで、現代ドイツ語における結果構文を中心とした関連構文のネットワークを同定すると同時に、ドイツ語の文法体系の中での当該構文の位置づけを試みた。

研究成果の概要（英文）：German resultative constructions had been long considered to form a unified grammatical category as a single type of grammatical construction. However, it had also been argued that their concrete usages and examples show that they may be sub-categorized by their some distinctive characteristics in terms of syntax and semantics. In this study, so-called German resultative constructions and other related types of constructions were taken up to reveal that by identifying and analyzing them, the relationship between them is a continuous one. Eventually, a grammatical network of certain constructions in the German language, namely the resultative constructions and other related types of constructions, has been proposed.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
2012年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	2,500,000	750,000	3,250,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：独語学、結果構文、結果の目的語、中間態構文、同族目的語構文

1. 研究開始当初の背景

「結果構文」は、ここ約10数年間で主に英語を中心に研究が進行してきたものの、他言語の研究者も関心を持つ汎言語的に非常にユニークな性質を持った構文である。過去においては、ドイツ語学の分野でも英語で主

張されていることがドイツ語にも当てはまるといった事例研究や、結果構文の特性のうちで僅かに一部分を扱ったものは散見されていたが、近年になってドイツ語結果構文の体系的な記述研究や当該構文の持つ諸特性の解明を試みる研究が始まった。それらの研

究によって、ドイツ語結果構文に見られる多様な用例がどのような特性によって結果構文としてのまとまりを保ちながら、どのような条件の下で観察された諸特徴がどの程度まで変化しうるのかを示された（研究代表者の一連の研究業績を参照）。

その一方で、結果構文の広がりを検証していくなかで、当該構文がドイツ語の文法体系の中でどのような位置を占めているのかという問題が浮かび上がってきた。具体的には、ドイツ語には一部の結果構文の表す事態と類似・等価と思われるような事態を表現することのできる語彙的要素が存在していたり、文の基底動詞が自動詞であるため、本来は要求しえない文要素が特定の「構文」中では生起可能となるような環境を作り出したりすることがある。前者はドイツ語に特徴的な複合動詞を用いる構文であり、後者はいわゆる「同族目的語構文」として知られている。このような問題意識は、結果構文がドイツ語の文法体系の中で他の構文とどのような関連を持ちながら存在しているかという構文間のネットワークの問題であり、ドイツ語文法がどのように構成されているかという文法の構築問題と密接に関連している。研究代表者のこれまでの研究で、結果構文の持つ一側面と隣接・近接関係にあると考えられる他の文法的カテゴリーとの接点や境界を考慮する可能性が開かれ、互いに部分的に重なり合う複数の構文間の関連性・連続性も考察の重要な対象となった。

2. 研究の目的

(1) 本研究課題はドイツ語における結果構文を中心とした構文ネットワーク解明の包括的・体系的な研究として、これまで研究代表者が行ってきた一連の研究成果を継承し、結果構文のサブタイプ・モデルを前提とする。

(2) 結果構文と伝統文法で「結果の目的語」と呼ばれる文成分との連続性・関連性を考察する。一般に、結果構文では事態を引き起こす基底動詞と結果状態を表す結果句の相互作用によって目的語の（最終）結果状態が確定されるのに対し、「結果の目的語」は事態を表す基底動詞の意味作用のみで生起可能となる。「結果表現」というドイツ語文法に存在する巨大な意味場の中で両構文の棲み分けを検討することで、動詞の作用による結果描写の可能性を解明していくことを目的とする。

(3) 主として結果構文の非典型系的なタイプの用例に見られる「自動性・他動性」の連続性を主眼におき、他動詞を基底として自動詞にも構文を拡張させている結果構文と、他動詞を基底動詞とし再帰表現を用いること

で意味的な自動性を統語的に作り出す中間構文や、自動詞を基底としつつも文中に同語源である対格名詞の生起を許す同族目的語構文など二律背反的な「自動性・他動性」を超えて、自動詞化および他動詞化のスケールの中で当該諸構文の「自/他動詞化のメカニズム」を捉えなおすことを目的とする。

(4) 上述の研究結果に基づき、結果構文を中心とした構文間のネットワークを構築し、ドイツ語の文法体系にみられる有機的な構文ネットワークの提案を目的とする。

3. 研究の方法

(1) 研究代表者は、言語研究において生の言語データは最も重要なものであると同時に、研究の質を左右しかねないものであると考えているため、地道な資料収集は研究期間を通じて継続していく予定であるが、初年度の始めに一定期間集中してある程度まとまった資料収集を行う。その後、年度ごとに分析対象となる構文の先行研究評価を行い、その結果に基づいて結果構文との比較・対照を随時進めていく。

(2) 平成 22 年度は、結果構文の更なる用例にも注意を払いながら、新たに分析対象となる「結果の目的語」、「中間構文」、「同族目的語構文」などの言語データをできるだけ包括的に収集していく。研究代表者はより実証的な研究を目指すため、研究基盤となる言語データを広範囲に渡って収集するよう常に心掛けていくが、不連続の構成素からなる構文の研究を行う場合、望ましい用例の検索・収集には、検索技術面での限界から電子コーパスの使用のみでは十分とは言えないケースが少なくないため、研究期間を通じてドイツ語のテキストを調べていく地道な作業を平行してすすめていく事が不可欠であると考えている。

(3) 平成 22-23 年度では、動詞の表す動作の結果として生じる目的語である「結果の目的語」を扱う。「結果表現」という意味場の中で考えれば、結果構文中の目的語は事態を引き起こす基底動詞と結果状態を表す結果句の相互作用によって（最終）結果状態が確定されるが、「結果の目的語」は基底動詞の意味作用によって出現する点で、結果構文以上に結果志向的な構文と考えられるため、「結果の目的語」が生起する基底動詞の形態的・意味的性質や他動性/因果関係の強さ、時間性などに注目して、結果の目的語を生み出すメカニズムを考察する。

(4) 平成 23-24 年度には、結果構文と同様に自動詞・他動詞の両領域に広がる構文と考え

られる「中間構文」を取り上げ、まず概要と用例を精査した上で、結果構文との比較・対象を行う。

4. 研究成果

(1) 結果構文は、構文中に生起する基底動詞の他動性に注目した場合、他動詞と自動詞の両領域に広がり、多様な統語的・意味的特性を有している構文と規定できる。プロトタイプ理論の観点からは、その用例が典型的なタイプから非典型的な拡張タイプへと拡大していくにつれて、構文中に生起する基底動詞は他動詞から自動詞に移行していく。それに伴い、構文中の目的語は基底動詞の直接的な意味制約から離反し、結果状態の描写を受ける要素として構文中での意味的自立性を強め、2次の叙述関係の主語としての役割が前面に出てくる。この他動性の変化や目的語の前景化にも関わらず、結果構文は文法的カテゴリーとしては1つにまとまっていることに注目して、二律背反的な「自動詞・他動詞」の対立を超えて結果構文の構文的連続性を捉え、構文中に生起する目的語の担う役割を生み出すメカニズムを考察した（島 2013a、Shima 2013 参照）。

(2) 結果構文のサブタイプモデルは、Goldberg/Jackendoff (2004)で下位構文の1つとして仮定された他動詞型結果構文でも実は均質なものではなく、その内部にはさらに統語的・意味的多様性が存在していることを示している。しかしその多様性は充分動機づけられており、互いに有意味に関連し合い、放射状の構造をなしながら、1つの文法的なカテゴリーを形成することを主張した（島 2013a 参照）。

(3) 先行研究をふまえた上で、ドイツ語と英語を同時使用しているテキストを分析することによって、両言語でどの程度結果構文が日常言語に浸透しているかを観察するとともに、両言語を比較対照的に分析することによってドイツ語と英語で生起している結果構文の特徴を精査し、今後の類型論的分析の基礎づけを試みた（Shima/Naruse-Shima 2013 参照）。

(4) 「結果の目的語」、あるいは関口存男（関口 1931/1994: 352; 関口 1953/1982¹⁹: 457 f. などを参照）がドイツ語文法の中で巨大な意味場を形成する結果表現の主要な一部として「結果挙述の目的語」と呼ぶ文肢は、ドイツ語の伝統文法では一般に *effiziertes Objekt*（被成目的語）の名称で呼ばれ、*affiziertes Objekt*（被動目的語）と対比して論じられることが多い。結果構文がその定義から基底動詞が表す事象の結果、目的語が

変化を被り、その最終到達状態を形容詞が規定するという、言わば動詞と形容詞の相互作用によって目的語の状態を決定する構文だとすれば、結果構文中の目的語は動詞の表す行為が直接的、間接的に向かう対象として、動詞の描写する事象とは別にすでに存在していると考えられるため、被成目的語である結果挙述の目的語とは異なり、被動目的語と解釈することができる。このことは、結果挙述の目的語と結果構文が結果を表す表現手段という共通の意味場に存在するものの、生起している目的語の性質という観点からは同質の構文ではなく、むしろ互いに隣接している構文と言えることを主張した（Shima 2011、Shima 2010 参照）。

(5) ドイツ語の文法体系の中には、動詞の意味する行為や過程の結果として生み出される被成目的語の中に、周辺のなものではあるものの、「結果の目的語」とは別にもう一つの文法的カテゴリーが見出せる。それが、典型的には自動詞とともに生起し、動詞と同語源を持つ対格の名詞句として具現化する同族目的語である。同族目的語は、典型的な対格目的語と比較すると様々な形態的、統語的、意味的特異性を有しているが、言語類型論での研究成果を視野に入れつつ同族目的語が文中で果たしている機能を考察した場合、同族目的語の有無により相対的な他動性にわずかながら差が生じていることがすでに認められている。結果構文のサブタイプのうち ST2 は、自動詞を基底動詞としながらも、文中で対格目的語との共起が可能となっている点で、同族目的語構文と形式上の類似性を持つ。これは特定の構文の中で自動詞の他動性が高められ、対格の生起が可能になったためと解釈可能であるが、その際高められる他動性の程度は一律ではなく、両者に差が生じていることを完了の助動詞選択に基づいて提示した（島 2013a、Shima 2010 参照）。

(6) 中間構文は、目的語の前景化という点で、また基底動詞として他動詞からも自動詞からも形成され、自他両領域に広がる構文として捉えられる点でも結果構文との類似点が認められる。また、目的語に再帰形という特別な統語形式を要求する点では結果構文の ST3b や ST2b とも強い類似性を持ち、意味的にも中間構文の「主語の属性解釈」や「モダリティー解釈」や、結果構文の「誇張表現」といった意味解釈上、語義の単なる総和を超えた「拡張された意味」が認められることを提示した（島 2013a 参照）。

(7) 特性の付与という観点からは、主語が動詞の表す行為を通じて作り出した結果状態を目的語に帰する結果構文と、文中に言語化

されることはないものの潜在的に存在する動作主が動詞の表す行為の遂行についての評価・判断を行い、それを主語として生起している意味上の目的語に帰する中間構文とは、表層的には潜在と顕在の差こそあれ、どちらも動作主が行う行為がまず前提として存在し、その行為によって動作主が「成し遂げたもの」(結果構文ではその行為の結果状態で、中間構文ではその行為の判断)を必須文肢として文中に生起している名詞句(結果構文の場合は目的語で、中間構文の場合は主語)の特性として付与する点で共通していることを主張した(島 2013a 参照)。

(8)「同族目的語」という文法現象そのものは古くから知られているものの、純粋に文体上の問題として扱われることが多かったが、機能的言語類型論の立場から「意味地図」を用いることによって意味的な領域においてその多様性と創造性を持ちうることを経験的な言語データに基づいて英語とドイツ語の比較対照研究を行った(Naruse-Shima/Shima 2013)。

(9)本研究では、動詞の他動性を中心にドイツ語に存在する4構文の文法的な関連性を構文横断的にも考察した。主語が動詞の表す行為を行うことで目的語の状態を変化させ、目的語にその結果状態を帰する結果構文を出発点に、目的語の出現や消失といった目的語の全体に関わる意味を表すような高い他動性を示す動詞と共に生起する結果挙述の目的語、そして同語源の自動詞文に生起して自動詞文の他動性を相対的に高める働きを持つ同族目的語、文中から動作主を降格させることで残った文肢を前景化させる中間構文である。今回分析対象としたものは全て他動詞型の構文パターンを持つものである。その中で結果構文、同族目的語構文、中間構文の3構文は自他両領域に存在し、他動性変換のメカニズムが構文に大きく関わっている。結果構文は基底動詞が他動詞から自動詞へと拡張し、自動詞領域においても他動詞型の意味を担うために構文中では他動詞化メカニズムが機能していると考えられる。同族目的語構文は、基本的には基底動詞は自動詞であるが、他動詞のものも少なからず存在している。また構文全体としては結果構文同様やはり他動詞型の構文となっているため、他動詞化メカニズムがここでも働いていると考えられる。それに対して中間構文の場合は、基本例は結果構文同様、他動詞型であるが、動作主を降格する構文である中間構文では文の必須文肢を1つ減らす仕組みである自動詞化メカニズムが働いていると考えられる。つまり、この3種の構文は2つのパラメータ(基本形から拡張形への方向と拡張形を生

み出す変換メカニズム)の点で三者三様の構文であることを主張した(島 2013a 参照)。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計6件)

(1) 島憲男、「文法的ネットワークの観点から見た構文の拡張と動詞の他動性」、*Sprachwissenschaft Kyoto*、査読有、第12号、2013a、印刷中

(2) Shima, Norio、"Vielfalt und Einheit der grammatischen Erscheinungen im Deutschen: Ein Vergleich der Resultativen Konstruktionen mit den in der SEKIGUCHI-Grammatik entwickelten Begriffen *Lativum* und *Ergebnisprädikat*."、*京都産業大学論集 人文科学系列*、査読有、第46号、2013b、pp. 355-370

(3) Shima, Norio、Naruse-Shima, Ryoko、"Resultative Konstruktionen im Englischen und Deutschen: Einheitlichkeit und Vielgestaltigkeit der grammatisch-funktionalen Manifestationen in ausgewählten Texten."、*Akten des 45. Linguistischen Kolloquiums Veszprém (Ungarn)*、査読有、2013、印刷中

(4) Naruse-Shima, Ryoko、Shima, Norio、"Kognate Objekte im Englischen und Deutschen: Eine kontrastiv-semantische Analyse."、*京都産業大学論集 人文科学系列*、査読有、第46号、2013、pp. 371-391

(5) Shima, Norio、"Ergebnisobjekte im Deutschen: Ein Erklärungsversuch ihrer Genese"、*Kürschner, Wilfried/Reinhard Rapp/Jürgen Strässler/Maurice Vliegen/Heinrich Weber (Hg.). Neue linguistische Perspektiven: Festschrift für Abraham P. ten Cate*、査読有、2011、pp. 55-66

(6) Shima, Norio、"Inneres Objekt als grammatischer Transitivierungsmechanismus."、*Ten Cate, Abraham/Reinhard Rapp/Jürg Strässler/Maurice Vliegen/Heinrich Weber (eds.). Grammatik · Praxis · Geschichte: Festschrift für Wilfried Kürschner*。査読有、2010、pp. 89-96

[学会発表] (計4件)

(1) 島憲男、「構文の拡張と動詞の『他動性・自動性』: 構文ネットワークの観点から」、*京都ドイツ語学研究会*、2012年12月01日、京

大会館

(2) 島憲男、「ドイツ語結果表現の諸相」、京都産業大学外国語学部研究懇話会、2010年12月18日、京都産業大学

(3) Shima, Norio、"Resultative Konstruktionen im Englischen und Deutschen: Einheitlichkeit und Vieltalgestaltigkeit der grammatisch-funktionalen Manifestationen in ausgewählten Texten", 45. Linguistisches Kolloquium、2010年9月16日、Pannonische 大学/ヴェスプレム、ハンガリー

(4) Shima, Norio、"Die Begriffe Lativum und Ergebnisprädikat in der SEKIGUCHI-Grammatik und die sog. Resultativen Konstruktionen: Vielfalt und Einheit der grammatischen Erscheinungen im Deutschen", XII. Kongress der Internationalen Vereinigung für Germanistik (IVG)、2010年8月2日、ワルシャワ大学/ポーランド

6. 研究組織

(1) 研究代表者

島 憲男 (SHIMA NORIO)

京都産業大学・外国語学部・准教授

研究者番号：80360121